



ピノコパパのエッセ
イ集から



時代に迷う人たちへ

pinokopapa

資本主義は 欲望 の体系 と私は思っています。

資本主義は商品経済を社会規範とする と恐慌論にもあります。そして 利子率と利潤率の対立が 恐慌を引き起こすといえます。しかし、恐慌論 の序論に 資本家的産業資本の生産力の増進 を言います。この方が飲み込み易い感じがします。商品を大量に生産し、消費者に安価に渡せます。 生活の向上 と恐慌論にもあります。大量生産 — 大量消費が行われます。そしてその消費を上回る商品の生産が行われ、それが停滞し、それを消費、消滅させようとする と価格が暴落、つまりは利潤率の暴落となり、恐慌を引き起こすこととなります。または、もう一方の選択肢、絶対的な商品の大量消滅の方法としての 戦争 を選ぶことになるかもしれません。アメリカのイラク戦争は、米軍の大量に貯蔵した武器の廃棄のために行ったというような、一部歪んだ見方があったぐらいですから。

ここまで 恐慌論 の、余りに示唆に富んだ言葉に駆り立てられて独善的に記してしまいました。

長崎の五島列島は昭和も相当遅くまで、自給自足の生活を営んでいおりました。ですから、殆どお金も要らずにそれなりの豊かさで、島民全体が協力しあって暮らせていたそうなんです。そんな中、三種の神器 が島にも入ってきます。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、そんな 便利な家電が彼らの島にも普及してきました。薪、炭がガスになり、テレビを楽しみ、主婦にとって一番の苦勞が、洗濯機に助けられることになりました。そして、多くの若い人がそれを購うために九州や他の地に出て行きました。 生活の向上 です。そして、貨幣の侵入 です。資本主義は、まず貨幣が侵入してきます。私達はごく当たり前にお金で物事を判断しますが、江戸時代末期まで、地方の農村ではお金など無くとも、殆どが物々交換で済ませてしまえました。税金は 年貢 で 米 でしたから。だからこそ、明治になり、税金をお金で収めなくてはならなくなって 血税一揆 が起こってきたのです。またそれは、西洋人が生き血を欲しがっていて、それを政府が代わって取り立てるのだと誤解したからでもありました。そして、それほどに一般農民はお金というものに馴染みがありませんでした。

五島列島では、貨幣の侵入を見た途端、村が崩壊して行きました。大昔のことではありません。昭和40年までのことです。残された島民は年寄りばかりになり、遂にはその人たちも都会の子供達のところへ移って行き、村は崩壊し、島は無人島になってしまいました。そんな島にかつての島民が集まってくるようなことがあります。誰も来なくなった島の協会の行事に、船に乗ってやってきます。

資本主義は、大量の商品を生産、供給し、それを消費させるために、貨幣を尖兵として、社

会の隅々まで侵入させます。そして最後には、全てのものをお金の額に換算して、その価値を決めることに疑問を持たなくしてしまいます。貨幣も 他の商品に交換できる商品の一つ にすぎないものです。

経済学で世界を見通せるか

経済学をマルクス経済学と近代経済学という分け方をするのは日本だけだそうです。マルクス経済学を日本では随分と特別なものとして扱ってきました。まるで、革命の預言書か福音書のようなものでした。大学の半分以上でマル経が教えられていました。近経、マル経というと懐かしい思いがします。こんな変な略し方もしていました。

マルクスの書を、革命の預言書のようにもてはやすのは可笑しいと罵ったのは吉本隆明でした。外から入ってきたものを、なんでもありがたがるのは日本人の悪い癖だと言ったと思います。ましてやあの激しい個性です。予言と教義に満ちた資本論という学問の書は、革命の聖書になっておりました。これを批判するなんて、とんでもないことで、一言一句、その文字面の向こうに書かれた真意を読み取るのが使命である、そんな雰囲気漂う、おかしい時代でした。

ほとんど素人ですので、なにより根本的な概念からしてわかりません。現代を資本主義体制というならば、マルクス以外、近代経済学では資本主義をどう定義しているのでしょうか。本屋に行っても新聞でも、どこでも最近では資本主義の崩壊とか限界などと書きたてています。マル経は資本主義を解明しようと始めました。じゃ、近経はどういってるんだろうと調べてみますと、へんなコメントにぶつかりました。

現代の経済体制を「資本主義」というシステムとして把握するのはマルクス経済学しかない

ではどう述べるのか。これがよくわかりません。自由市場経済とかいうのでしょうか。そうでもなさそうで、結局資本主義と言っているようです。ではなぜ上のようなコメントが出てきたのか。人、物、そしてその間にお金が行き交う、これが現代です。ごく当たり前の日常です。ところが、これは近代もしくは現代にならないと、普通のことにはならなかったのです。日本を見ればごく身近なこととして理解できます。悪代官は相模屋から小判を敷き詰めた菓子折りを貰います。これはこれで本当だったのだと思いますが、その当時の富の源泉は米でした。それが、明治になって税をお金で納めよと言われ、庶民は困惑してしまいます。お金など普通に流通していなかったからです。ほぼ自給自足の生活をし、それに加えて、米という生産物を持っていたということです。貨幣が流通する体制を貨幣経済というならば、それとはほど遠いものでした。貨幣は都市部でのみ見られ、大半の人は小判など見たこともなく一生を終わるほどでした。ですから、税金を血税といわれて理解できず、大騒動が勃発したのです。

それにしても、現代経済体制を資本主義とし、その体系的な全容解明をなしたのがマルクスでした。近経は現代経済の体系全体を分析してはおりません。ですから、経済学全般としては、資本主義について、

商品経済の広範な発達を前提に、労働者を雇い入れた資本家による利潤の追求を原動力として動く経済体制

生産手段を資本として私有する資本家が、自己の労働力以外に売るものを持たない労働者から労働力を商品として買い、それを上回る価値を持つ商品を生産して利潤を得る経済構造。生産活動は利潤追求を原動力とする市場メカニズムによって運営される。

といった定義づけがみられます。これって、資本論の一説ですよ。しかし、これが暗黙の了解のもとでの、現代経済学の基本的理解であるようです。

そんなことを考え続ける原因となったものは、実はNHKの 欲望の資本主義 という番組を見たからでした。その中では流れるように次々と、世界的な経済学者が、如何にも示唆に富んだ言説を語り続けます。そして、ルールは密かに書き換えられているといいます。それならば、いっそ、自分で考えてみようと思立ちました。まず、お金についてです。お金は資本主義と、人の欲望が生み出したものでした。以下、ちょっとしたエピソードから始めます。

お金ってなあに？

先だって何気なくNHK教育テレビにチャンネルを合わせると歌舞伎舞踊を踊っておりました。途中からでしたので内容は充分解りませんでした。どうも兄妹が酒を売りに来たらしい。ところが酒を買ってくれる人が余りおらず、退屈でもあったのか持ってきた酒を飲みたいと言いだします。しかしこれは売り物だから金を払えともう一方が言います。じゃあと懐にあった金を払い、一杯のみます。それを見て、もう一方も飲みたくなり、金を払うから飲ませてくれろと言い、懐から金を取り出し、これをもう一方に渡して酒を飲みます。あとは少しためらいがちであったのですが、金を払えば飲んでいいだろとお互い金を渡して、陽気に酒を飲み、踊ったり歌ったりの大酒盛りになります。

飲んで歌って踊って、そうこうしている内に持ってきた酒樽がからっぽになりました。酒が売れた、空になるほど売れて売り切れだと兄は大喜びします。大もうけだ、さあ金を出して見せろ、金はどうした、さっき兄者に渡した。そうして兄は自分の懐を探り、金を取り出します。それは最初に弟が兄に渡した金でした。なんでこんなに少しなんだ？は空っぽなのに。二人は首を捻り、考えます。しかし得心できる筈もなく、わけがわかりません。そしてもう解らぬまんま、

酔った勢いで馬鹿踊りをしながら幕は閉じて終わります。

なにか、今の世界の混乱はこんな簡単なことも解らなくなって、数字だけが踊っているように思えます。地球とその資源を食いつぶし、数字だけがあっちへ行ったりこっちへ行ったり。そのうち何も彼もが枯渇し、破壊され、馬鹿踊りでも踊ってなきゃ正気で居られなくなるかもしれません。

今盛んに日本のデフレが問題視され、ある党などインフレ・ターゲットを定め、物価を上昇させ、円安にしなければならない、と主張しています。日本の代表的企業のトヨタが一円、円高になると利益が360億減ると言われると、確かにびっくりします。株も下がり、貿易収支が赤字転落ともニュースでいいます。しかし私達庶民までが円高を斯くまで心配させられなければならないのでしょうか。こんなニュースの傍ら、海外へ行く人は円が強い今がチャンスだからとニコニコいいます。外からやってきた外国人は円が高いから大変だと言います。庶民にとっての円相場はこんな程度でしか直接は関わりません。ガソリンの価格とかも敏感ではありますが。

円相場について、テレビの解説者がしたり顔で言う、円安が貿易立国日本には良いことだ、いや円高のほうが庶民にはブランド品やガソリンが安く買えていいことだというようなことを言いたいわけではありません。

戦後、私達の親世代が何もないところから懸命に働き、次に私達団塊の世代がそれを発展させてきました。そうして得たGDP世界2位の地位でありましたが、私はそれを小学生低学年のとき、ラジオで聞いた覚えがあります。その時ラジオは ついに西ドイツを抜き と言ってたように記憶しています。私はそれを聞いたとき、子供ながらひどく高揚感を感じました。そして一緒に、西ドイツって凄いんだとも記憶に刻み込まれました。あの敗戦国同士の、そしてナチスドイツだった国が今まで第2位だったんだ・・・。

そこに来るまで、私達の親は大変なインフレとか通貨管理を経験しています。軍票、国債が一瞬にしてただの紙くずになったこと、預金封鎖、新円切り替え、つまりは旧円での貯蓄も消え去って、なかったことにされてしまったということなどの異常事態の後、さらにインフレが襲い、狂乱物価とか鍋底景気、神武景気、高度成長時代とそんな言葉が子供だった私にも聞こえていました。

いや、こんな古い話をしなくても、バブルの崩壊でお金の正体はわかります。なぜ人はお金を信用するのでしょうか。お金の信用って何故疑われないのでしょうか。国家がその威信にかけて保障するからでしょうか。本当は当てにならないと皆がうすうす知りながら使って、貯めて、稼いでいるのじゃないでしょうか。

先日ムンクの叫びが史上最高値の96億円で落札されました。これはピカソの87億円を追い越したと言っておりました。へー、ピカソよりムンクの方が高いんだ、とあってしまいます。お金のマジックだと思います。

この番組は、欲望の資本主義をより分かりやすく解説し、かつ爆笑問題のおしゃべりでなじみやすい内容になっておりました。欲望の資本主義では一言片句聞き逃すまいと集中して聞き取り、理解しようとしなければなりませんでしたが、そんなことが嘘のように呑み込めました。わからなくて、頭を振り絞ったのは何だったんでしょう。

この放送のテーマは、世界の成長は続くのかということで、欲望の資本主義とほとんど同じ中身でした。リーマンショックの後、世界は、とくに先進国はほぼ同じ病理に悩まされています。経済の長期停滞です。成長なき資本主義ということでしょうか。

資本主義は、1970年代をピークに、その成長率はどんどん落ちてきていて、これから先どうなるのか、予想がつかないといえます。その挙句がリーマンショック。そして、資本主義発祥の地、イギリスにおいてはヤングホームレスというのが8万人いるそうです。これは大変なことだといえます。若い労働力が就職できないなんて、これは経済成長の出発点が崩壊し始めている事を意味しているんだということです。そういえば以前、中国の高学歴の大卒者が、職につけなくて大変な暮らしをしているという報道番組がありました。彼らのことを確か、蟻族といったと思います。しかし後で、蟻族はまだいいほうで、鼠族と呼ばれる若者たちが出現したとも言っていました。蟻族は、学生寮の一室のようなところにたくさんの若者が暮らしていて、それが蟻の巣のようだということから、そう呼ばれるようになりました。ところが、地上にある部屋の部屋代が高いので、地下室に住むようになったのが鼠族です。しかし、日本もこの現状とよく似ていて、ネットカフェを定宿にして、何とかアルバイトで食いつないで生きている若い人がたくさんいるそうです。その日、稼ぎがなければネットカフェを出て、駅の構内とか公園で寝るしかないのです。彼らの職を求める手段は携帯かスマホ。そんな現状をどこかのテレビで見た記憶があります。資本主義経済の成長の出発点が崩壊し始めているのは世界中だということかと思えます。

今世界で起こっている不況はこれまでと全く異なっていると番組は指摘します。それが長期停滞という現象だといえます。この長期停滞が過去の恐慌や景気低迷と異なっている点は、これまでの経済対策が思うように効果を見せていないことです。

三回シリーズのマネーワールド 資本主義の未来を視聴して、第一回が難解でした。しかし二回目と三回目が資本主義世界の現状の報告であるならば、資本主義はなんと狂暴なんでしょう。二百五十年前現れた原始資本主義の方が、まだましと思えるほどです。

ここで私は別なことを思い出しました。司馬遼太郎氏のアメリカ素描です。私自身はアメリカに文化はないと思っていたので、アメリカには興味がなかったのですが、最近この書を読むと、アメリカは人種のるつぼであり、資本主義の極端に先まで進んだ実験国家、人工国家であると思えました。このエッセイは1986年に刊行されていますから、30年前のものということになり

ます。ですから、日本のバブル崩壊も世界のグローバル化も、ましてや今の資本主義の行き止まりの現状もまだありませんでした。しかし、司馬氏の見たアメリカはカオスの予兆とこれから起こることを予見させるに十分なアメリカ像をとらえていたと思います。今のアメリカの混乱は、トランプ・クリントンの大統領選が露わにしています。私にはこの大統領選が、アメリカ素描を読むことで、なんとなく理解できたと思いました。

といっても、アメリカ素描にそんなことなど一行も書いていません。アメリカ素描は次のように語り、文明論としてアメリカを語る準備をしています。

人間は群れてしか生存できない。その集団を支えているものが、文明と文化である。

いずれも暮らしを秩序づけ、かつ安らげている。

ここで、定義を設けておきたい。

文明は「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団(たとえば民族)においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない。

まるで緻密な社会学のようです。マックスウエーバーの論文はもっと読みにくいけれど、司馬氏の文章はすっと理解でき、なお同様に示唆に富んでいます。しかし、このような観点から書かれたアメリカ素描が、今日のカオスを予言しているように思えます。つまり、世界国家で人種のるつぼの人工国家は、経済でも資本主義がそのままの本性で、ありのままに振る舞える実験場でもあったのだと思えるからです。

さて、司馬氏がアメリカを訪ねてみようと思うようになったのは、アメリカ人が自国のことをthe Statesと呼ぶからだといいます。これをただ合衆国の略称だと言ってしまえばそれまでだが、そこに、法によって作られた人工国家だという語感がぬぐえないと氏は感じます。そして、氏の文明と文化の定義を明らかにし、種々の民族の混在する中で、世界に通じる共通の文明と思想を作り出し続けている国家は、世界中でアメリカしかないというのです。

氏はウォール街を訪ねます。そこは世界中のお金流れ込み、お金でお金を稼ぐところです。マネーワールドの第一回目だったかに、未知のフロンティアを失った資本主義は、仮想空間の金融の世界に新たな未知空間を見出し、そこでお金でお金を稼ぐようになったとありました。経済学の大げさな解説を待つまでもなく、司馬氏は、資本を投入し、ものを作って利益を得るのが

資本主義であるのに、物を作らなくなってアメリカの資本主義は大丈夫なのかと思ってしまったといひます。当然のことを当然に語った氏の言葉が、のちに起こった、会計の不正処理で株価の値を吊り上げて利益を得ようとする不正操作を示唆しています。

かれの作品は、1930年前後の、自分の利益のためには弱者が死のうと生きようと勝手だといひ資本主義のエゴイズムと非人間性を書いた。

アメリカという国は、最初にやってきたWASP（白人、アングロ・サクソン、プロテスタント）を頂点に、あとから来たものを次々安い労働力として扱ってきた。アイルランド系よりもイタリア系が安く、日本人はさらに安く、朝鮮系はもっと安い。そして新規参入民族を、労働市場を奪うものとして、順番に差別し、迫害してきた。

氏はこう書いて、労働力を商品と呼びます。それが、後から来た人たちの労働を、先に来て農場を持っている人たちが買ったたくさまを上のように述べることになります。期せずして、持てる者が持たぬものを搾取するさまをそのまま歴史の中に持っているのが、アメリカでした。ここに共感などはありません。同じ白人でも、カリフォルニアからの流人はウオーキとよんで差別もしましたし、銃や催涙ガスで武装して、迫害もしました。資本主義のエゴイズムは、表面こういひった凶暴な形で現れるのです。いま、トランプなる人物の出現も、そのあらわれ方に一つでしょう。

アメリカ素描を少し離れます。

奇妙なものが出てきました。仮想通貨、ビットというものです。これは国家が発行したものではありません。もちろん、もとはドルなり円でビットを買うのですが、これが今ネット空間で独り歩きを始めています。単にネット通販の決済に使われる商品券のようなものとの理解しか、私にはありませんでしたが、なかなかどうして、これが投機的になったりして複雑なものだとわかりました。ネット空間では、むしろ金と同じような認識のされ方で、専用のソフトを使って採掘することができます。そして、ネット空間での一日の取引量が制限されており。また、何にどう取引されたかはネット上に公開されます。これによって、不正な仮想通貨が使われることを防ごうというものです。

ビットコインといへば、日本でウイルスに侵食されたといひながら、実は外国人社長が横領していたという事件がありました。ですから随分と悪いイメージが植えつけられましたが、最近、政府が、ビットコインの購入には消費税をつけないようにすると決めました。要するに商品券の購入の際、それには消費税がつかないというのと同じ扱いです。もちろん、ビットコインで物を買へば、それには消費税がつきます。こんなことは些末なことですが、現実に国家が発行しない通貨が、ネット上とはいへ、流通し始めているのです。国家の保証しない、そして、国家の関与しない通貨が世界中を巡り始めています。お金に国家の保証と信用がいなくなった時代が始まっています。何がどうなるのでしょうか。たかが人間の作ったAIが第四次産業革命を起こし、資本主義

はまだ生き延びる、とか、ビットコインという国家を飛び越えた通貨が出現したり、もう予測のつかない世紀が始まったのかもしれない。